大野城市歴史資料展示室　解説シート　考古 No.17

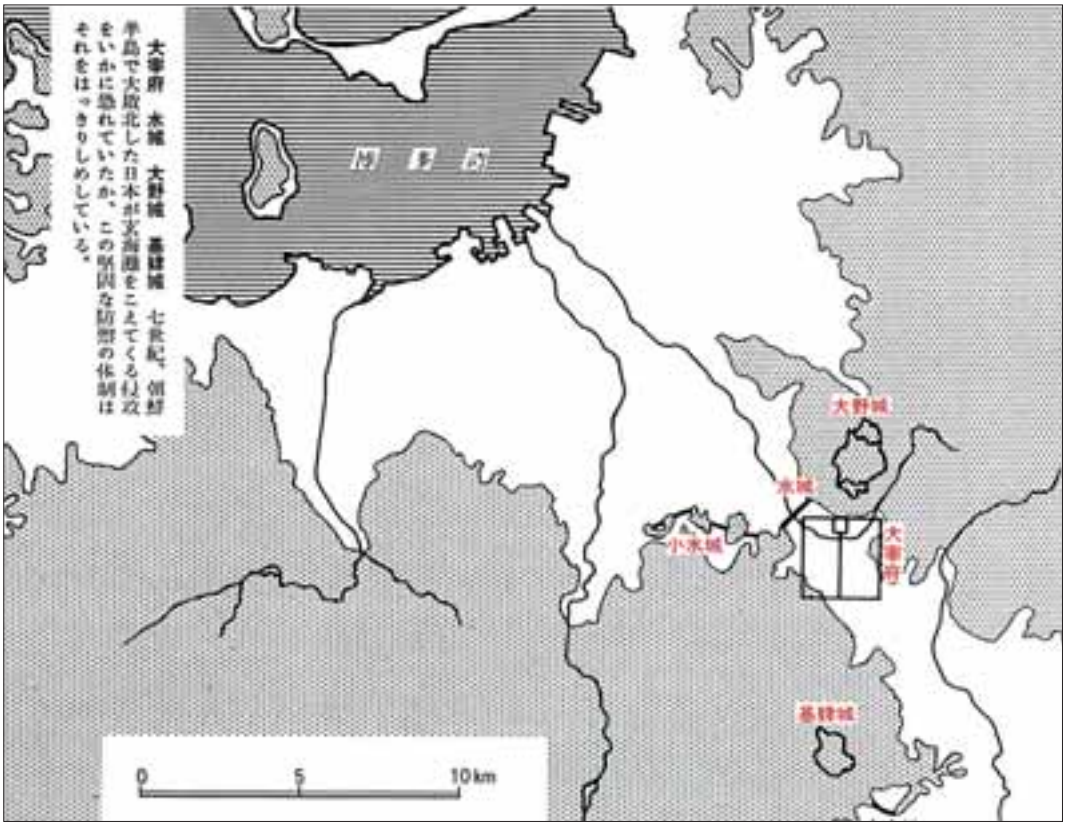
大野城跡

大野城市教育委員会

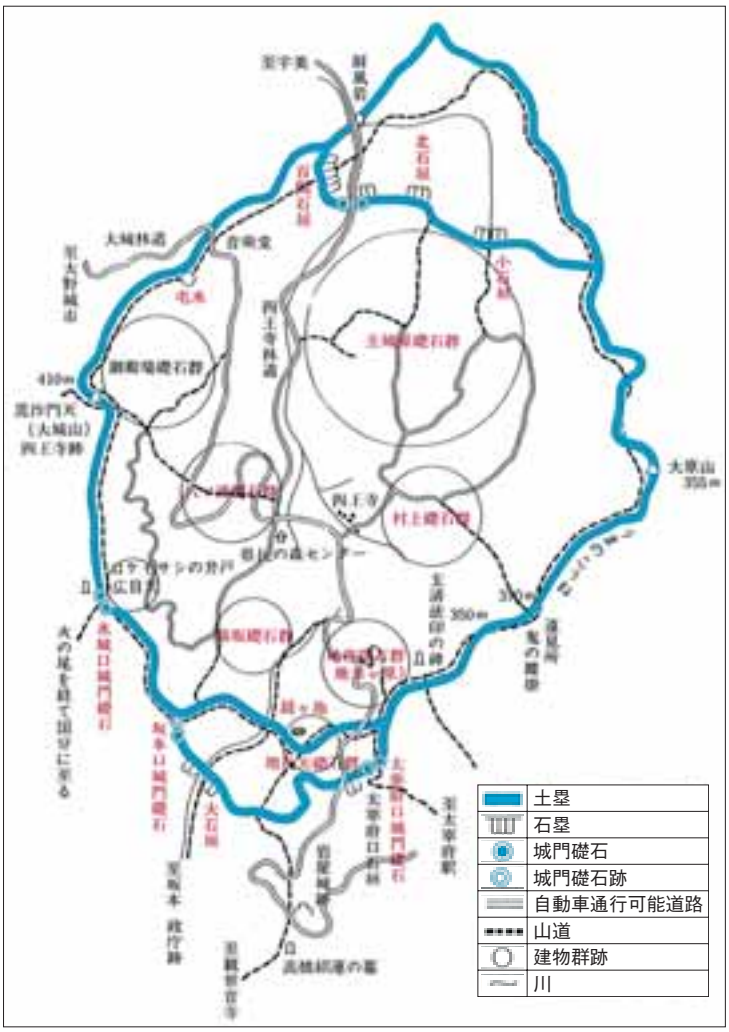
大野城市という市の名前は、四王寺山（正式な名前は大城山）全域にある特別史跡「大野城跡」の名前をとり入れてつけられました。「大野城」は四王寺山全体を範囲とし、大野城市・太宰府市・宇美町にかけて広がるたいへん大きなものです。大野城がつくられることになったいきさつは、解説シートNo.18の水城にも書いていますが、今から約1300年前の７世紀後半（600年代の後半）の日本と、中国や朝鮮との関係に深い理由があります。

当時の中国には「唐」という国が、朝鮮には「百済」・「新羅」・「高句麗」の三つの国がありました。そして、これらの国どうしが互いに戦争を繰り返していました。朝鮮の三国の一つ百済は、唐と新羅によって滅ぼされてしまいます。百済とつきあいの深かった日本は、百済を復興させるため海を渡って朝鮮半島にまで大軍を送りましたが、日本側の敗戦となってしまいます。この戦いは「白村江の戦い」と呼ばれる663年の出来事ですが、この敗戦の結果、今度は唐と新羅が日本に攻め込んでくるかもしれないというたいへん危ない状態になりました。

唐と新羅の攻撃に備えるため、九州を治める役所「大宰府」を、海岸から離れた現在の都府楼跡



大野城と周辺の関連する遺跡（石松好雄・桑原滋郎『大宰府と多賀城』岩波書店より）



大野城全体図（古都大宰府を守る会編『目で見る大宰府』から）

の場所につくり、その前を水城や小水城で防ぎました。この防衛線が破られた時、逃げ込んで体制を整え直す施設として四王寺山に大野城がつくられました。南側の基山には「基肄城」もつくられました。

左の図のように、山の高い所と谷には総延長約８㎞の土墨や石墨（石垣）を延々とつくり、敵が攻め込んでこられないようにしています。その内側には食糧庫や武器庫と考えられる約70棟の建物を建てました。建物跡は礎石だけが残っています。７ヵ所の門もありました。左下の写真は、大野城の石墨の中で最も大きい「百間石垣」です。四王寺山に登る車道からもよく見えます。長さ約200ｍ、高さ約６ｍもの堂々としたものです。

大野城をつくるに当たっては、朝鮮（百済）の技術者の計画と技術がとり入れられています。歴史学上は大野城を「朝鮮式山城」と分類しています。幸いにも唐と新羅の攻撃はなく、大野城がその役目を果たすことはありませんでした。

大野城には「城」という字が使われていますが、高い石垣の上に天守閣がある普通の城とは、時代も形も全く違うということに注意して下さい。ですから四王寺山に登っても、普通考えるような城の跡はどこにもないのです。四王寺山には「岩屋城」という城跡がありますが、大野城がつくられた時代より約900年も後のことで、何の関係もありません。

百間石垣

展示室には大野城の模型を展示していますが、一度は四王寺山に登り、大野城市のシンボル「大野城」の真の姿をご覧になることをおすすめします。